

終了報告書

(報告年月日 2014 年 1 月 23 日)

留学プログラム名	派遣交換留学
所属 (本 学)	理工学 学部 / 研究科 土木工学 学科 / 専攻
留 学 先 国	アメリカ合衆国
留 学 先 大 学	カリフォルニア大学バークレー校
留 学 期 間	2013 年 7 月 27 日 ~ 2014 年 1 月 19 日

①留学先大学についての概略

カリフォルニア州北部サンフランシスコの近郊都市、バークレーにある州立の大学。「カリフォルニア大学システム」と呼ばれる 10 校の中で一番早い 1868 年に創立され、現在はその本校と位置づけられる。バークレー校を呼称する際には、本校の地位への敬意をこめて“Berkeley”の呼び名を用いず、単に“Cal”という名称が用いられることも多い。

自らの専門分野である土木工学、交通工学分野では世界の 3 位以内の呼び声が高く、該当分野に新たな考え方の枠組みを数多く、脈々と提唱してきた歴史を有している。交通工学研究室(Transportation Lab.) では、近年の卒業生もまた、欧米の有名大学でポストを得ている例がよく見られる。

②留学前の準備

受け入れ教員を必要とするプログラムであることから、留学開始前年の 11 月頃から、こちらの指導教官の懇意の先生にコンタクトを取っていただき、許可を得ることができました。続いての連絡は、本合格が出て現地校に提出する推薦書類を作成する 2 月末。以後受け入れ許可などのステータスの変更が出るたびに、メールで連絡を取っていきました。

研究計画については、学部からの 3 年継続所属のメンバーは学部卒業時に研究内容を変えられるという慣例が土木工学専攻に幅広く広まっており、学士論文の研究を極端に推し進める必要はないという指示を受けていたので、今後の履修・卒業計画には大きな不安は感じていません。ただし①の概略に挙げたように、名門中の名門に籍を置くチャンス。これを無駄にしない手はないという思いもあり、自分のペースで少し研究に踏み込んでみました。詳細は次の項で説明したいと思いますが、短期間ながらも身のある経験ができた実感しています。

就職活動については、説明会の初動にこそ追いつかないものの、大勢に影響を与えることは無いという判断のもと、帰国後に通常通り合流する形を想定していました。⑨で詳説しますが、実際戻ってきた印象でも、その計画に問題はなかったかと思えます。

③留学中の勉学・研究

単位取得のできないプログラムであったため、講義 2 つとセミナー 1 つ(8 単位に相当) を聴講しました。この他にも、Ph.D. 学生の発表練習を兼ねたセミナー(Ph.D. Seminar) や、外部のスペシャリストを招いて行われる 1 時間のセミナーが毎週行われていて、興味深く聞かせていただくことができました。

研究に関しては講義関連で要する時間との兼ね合いもあり、講義期間中は既往の論文に触れること、言うなれば基礎体力作りに時間を割くよう心がけました。終了後は自分の事に割ける時間が増えたので、研究に対する自分のビジョンを簡単にまとめ、指導教官の先生に打ち合わせの時間を割いていただくことができました。

打ち合わせは三度取っていただいたのですが、二度目に与えていただいた論文をきっかけに、自分の考えているトピックの立ち位置、本当は何がしたかったのかが明確に整理できたことを、非常に感謝したいと思います。先生自身にも、最終的に「やりたいことが明確にわかった」というコメントをいただき、ごく最初のステップではありますが、研究をやっている初

めて「報われた！」という思いを抱くことができたと思います。

このエピソードも含め(与えていただいたのは2010年の、Transportation Lab.の卒業生による論文でした) 歴史の長さゆえ、バークレーでは研究の「系譜」を大事にする印象を受ける機会が多く、伝統の誇り、素晴らしさを感じました。

④留学中に行った勉学・研究以外の活動

サンフランシスコ・ベイエリアは公共交通手段も発達し、車を保持しなくとも移動の自由が高いことは特筆に値すると思います。週末は近隣の街に出かけることもありましたが、それ以上にバークレー自身が娯楽に尽きない街であったと感じます。バークレーは海から山に抜ける美しく気候の優れた街で、趣味のランニングもはかどりましたし、マリナーでマリンスポーツを楽しむこともありました。週末は大学のフットボールの試合もありましたし、ファーマーズ・マーケットやフリーマーケットも数多く開かれ、歩き回るだけで気分転換になるような街でした。

また平均して月に一回程度、西海岸を中心に旅行の機会を持つことができました。西海岸はアメリカ国内では比較的温暖で天気の良い街が多く、バスも飛行機も工夫すれば安い料金で取れるため、気軽に利用することができました。いわゆる観光地での感動だけでなく、交通という側面についても日本では学べないこと、特に料金制度に対する価値観の違いなどを学ぶことができたと思います。

⑤留学費用について

誰もが口を揃えると予想できますが、バークレー市はアメリカ国内では驚異的な物価を誇ります。市のホームページによれば、最新の最低賃金は時給15.56ドル(2013年6月30日改訂)改訂時点では全米最高の値であったと聞いています。笑い話としてはミネアポリスを訪問した際、僕がバークレー感覚でハンバーガー単品だと思った値段は、現地ではフライドポテトを含む値段表記だった、ということがありました。それほど極端な差です。

ただ「物価が高い」だけではなく、高い物価「上昇率」を誇っているのも見逃せません。公共交通のスト交渉が延期された際、学内の新聞(Daily Californian)でも「会社側の提示は誠意のあるものだが、バークレーの異常な物価の上昇に足りるものではない」というコメントが紹介されるなど、シビアな状況が手に取って伝わってきました。学内のカフェテリアも、講義期間の始まる8月下旬に突然20%程度値上げするなど、驚異的な側面を垣間見ました。

加えて、円安も大打撃の要因となりました。自分の到着した7月末から為替は10%円安に振れましたし、留学を決意した頃は1ドル78円でしたから、実に30%以上円安に振れた(予算想定が上に振れた)ことになります。

その上で、滞在中の生活費は月平均2000ドル程度。月800ドルのシェアルームに住み、インターネットや光熱費を払い、衣食に伴う生活必需品を買い、残りを旅行や娯楽に費やしたイメージです。僕の場合、他のメンバーより移動や旅費の割合が大きいとはいえ、ほぼ外食をしなかったとは思えない費用がかかりました。これに、例の「30%」が入ったと思うと、当初の想定からは信じられない額に達してしまったのが現状です。しかし驚くことに、現地の大学側からは月2500ドル程度を想定するよう事前に達しがあるなど、これでも安かった方といえそうです。このトレンドが続かないことを祈るのみですが、その望みは薄そうです。

この危機をかなり早く聞きつけた僕は、学内外を問わず、奨学金への応募を人一倍手厚く、特に学内では対象となるすべてのプログラムに対して行ってきました。しかし現実には、各種説明会の時点で手厚いと聞かされていた月額奨学金も手にすることができず、非常に辛い思いをしながらの滞在となりました。留学を奨励する立場ではありますが、残念ながら非常にリスクの高い滞在になるよ、という側面もまた伝えなければならないと感じます。他の項で余すところなく紹介するように、それを越えた先に素晴らしいものがあるのも事実、バークレーの最大の魅力ですが、予算制約がそのハードルを非常に高くしているとも感じます。

⑥留学先での住居について

結果として、住居探しには非常に難儀しました。International Houseはキャパシティが十分でなく、大学のハウジングオフィスも十分な件数を斡旋しているわけではない印象でした。さらに1年契約を望む家主さんが多いので、自分のように1学期で訪問する人は特段の注意

を必要とすると思います。半年滞在を予定している場合、現時点でのベストは秋学期だけバークレーから留学する学生の部屋を借りることだと思いますが、最近では Facebook 上の学内メールアドレス所有者のみが利用できるページを参考にして、先のマッチングが行われているようです。

ちなみに運よく手に入れた場所は、研究室から徒歩 10 分程度、先にも触れた月 800 ドルのシェアルームでした。値段は（物価が高い）バークレーの中で少し高いようでしたが、比較的安全で街がきれいに保たれた地区に位置し、リノベートされたばかりのオートロック付きのアパート。安全には変えられないと判断しましたし、候補が多くないことも選択を後押ししました。とはいえ大学の Night Safety Shuttle が半ブロック先に到着する大通り沿いで、身の危険を感じることもなく、夜までの作業や遅い時間の到着も難なくこなすことができたのは、大事な要素であったと感じます。

⑦留学先での語学状況

言語は、言うまでもありませんが英語です。とはいえ専攻によってはアメリカ人学生が非常に少ない専攻もあり、交通系はその典型例だったと言えます。英語のアクセントも多岐にわたっており、そして全体的に速い。日本で測られる「英語力」とは違う意味で苦勞を強いられることもあり、なかなか準備の難しいところではあると思います。

日本人も少なくともありませんが、学部学生は親の赴任の都合などでアメリカの高校を卒業したメンバーが多いようです。研究者(Visiting Scholar)として来ている方も多い印象ですが、理系の日本人大学院生の姿は非常に稀という印象も受けます。交通系では、日本の研究室とのつながりも弱くはないのですが、僕が建物の中で唯一の日本人でした。

⑧単位認定、在学期間について

告知のある通り、バークレーのプログラムでは ①F-1 Visa を取得して学費を払い単位を取得する ②J-1 Visa を取得して講義は聴講するだけ という 2 通りの方法があります。僕の選択は后者で、1 Semester の在籍という扱いでした。在学期間の延長は行わないため、1 年後期に単位取得のできない、先に多少の不安を残すプログラムであることは否定できません。

しかし意外と知られていないこととしては、J-1 Visa を取得して留学する場合は「研究訪問者」なので、(おそらく) 滞在期間に非常に融通が利くということです。講義に出て単位を取れないプログラムである反面、講義の時期にフィットさせる必要性が必ずしも存在しません。たとえば秋学期は 8 月末～12 月中旬、春学期は 1 月下旬～5 月中旬ですが、滞在期間を 9 月頭～3 月下旬で申請し、秋学期を講義の聴講中心、残り期間を研究に専念して帰国、就職活動には全面的に参加し、2 年間で卒業というオプションも見えてくるわけです。講義の経験もふんだんに積めますし、その知識は少なからず研究に生かせます。航空券も繁忙期を外せるので安くなります。家探しだけ、苦勞することになってしまうかもしれませんが... いずれにせよ、ヨーロッパ圏の大学でよく見られるような、1 Semester か 2 Semester かという基準ではないことは、前向きにとらえてよいと思います。もちろん、講義を途中まで聴講して抜けてもいいやという考えはダメで、メリハリは必要ですが...

⑨就職活動について

もともと就活に間に合う最後のタイミングとして帰国時期を選んだので、今のところ困っているところはないのが現状です。ただし留学期間の最後に説明会を吟味して帰国直後の予約をかけることと、志望業界を選ぶ情報収集を 12 月に行っておくことに損はないと思います。

また、外資系コンサルタント 1 社の応募は滞在期間中に提出期限があり、日本との時差も考慮しながら必死にエントリーシートを提出したことがありました。書類は無事通過し、能力試験は帰国の 10 日後。理想的なタイミングで組むことができたと感じています。

⑩留学先で困ったこと

細かいことは挙げればきりがありませんし、どうしても物価の問題が先行してしまいますし、かといって大問題に直面したこともなかったので、特段挙げるべきことは無いようにも思います。これは近年のソーシャル・メディア発達の貢献が大きいようで、世界中どこにいても

繋がる環境を提供し、留学の姿を大きく変えることになったと感じます。僕はその恩恵にあずかることも稀でしたが、孤独や心の問題を克服するという留学のステレオタイプは、ある意味過去のものだと感じました。

ちなみに、この項で頻繁に取り上げられる現地校のオフィス関連への苦情については、専攻、国際室とも全くなかったと感じています。東工大からのメンバーを管轄していた方が何人を管理していたのかは存じ上げないのですが、応対も非常にわかりやすく、返信の速さも際立つ方でした。もちろんアメリカ人ですから休暇やビジネスアワーには従順なのですが、これも慣れれば苦ではないレベルです。

⑩留学を希望する後輩へアドバイス

ネット時代にありながら、情報収集には非常に難儀したことが率直な印象です。パークレーとのプログラムは、今年が協定締結(復活?) 初年度とあって、情報をどうやって手に入れるか、悩んだことも多かったです。先に同じプログラムで行った知り合いはいない、いざ着いてからも、聞いていたはずの数年前の情報が全く合致しない、等々。

アメリカは変化の激しい国です。交通を例にとると、地下鉄が8月にスト予告を出し、2ヵ月の猶予期間の果てに4日間のスト突入、ベースアップに運営側が同意した結果1月1日から突然電車の料金が上がる、といった経験もしました。シカゴ観光に赴いた際は、1週間前に切符の制度が変わったらしく、地球の歩き方の情報と一致しない、空港から出る地下鉄の切符すら買えない、なんてこともありました。変化が激しいということは、情報は新鮮でなければいけない。留学を経験して時間が経っていない人の話を聴く意味は大きいと思います。

また理想論ではありますが、できる限り多くの人々の経験を、少しずつ聞く機会を持つことを勧めたいと思います。つい最近の事ですが、冬期休暇中、アメリカ国内の他の大学に留学している東工大生がパークレーを訪れる機会があり、大学近くでパーティー(飲み会?) をする機会がありました。そこで各人から出てくる経験の数々は、僕の経験からは想像もつかない、同じキャンパスにいて全く違うものだったのが印象に残っています。授業の聴講の数、聴講を先生に許可されたか否か、研究環境の人種構成、周囲の日本人の数など、それぞれの証言は大きく異なってくると思います。全員が口を揃えるのは、物価の高さ、奨学金に対することくらい。(物価のことだけはもはや笑い話というか、自虐も込めてよく語られました..) ちなみにこの集まりですが、僕が他のメンバーに誘いをかけたら、すぐさま快諾してもらったという経緯がありました。少なくとも2014年に出発される方は、2013年の派遣メンバーの4人(実際は他のプログラムで派遣されているメンバーもいるので、知る限り5人) はかなりフランクに話すと思うので、気軽にコンタクトを取ってみてください。既に直接の知り合いもいると聞いていますし、交流課にその旨をお願いすれば取り次いでくれるはずですよ。

ここまで長く語った経緯ですが、偏った知識から固定観念を持ってしまうと、本当の面白さに気づかないのは損だという、単純な理由です。例えば隣町のオークランドは、ギャングの抗争が絶えない全米屈指の治安の悪い街であり、敬遠する日本人も多いそう。でも近年「絶対訪れておくべき街」としてNew York Timesにランキングされるほど、優れたアートやレストランに触れられる環境として名を馳せています。多くのミュージシャンを輩出し、4大スポーツであるNBAやNFL, MLBの試合もすぐそこ、日本人の娯楽観にとっては格好の場所であるはずなのですが... 一方で、同様にギャングの抗争が増加傾向で、治安の悪化が懸念されるシカゴは、直行便も数多く飛び、日本人にとって人気の訪問先でもあります。自分も知らなかったのですが、治安が悪いという先入観の不在が全てではと思うところです。

先輩や同期との間で、パークレーへの留学生、アメリカへの派遣交換留学生、そして他プログラムのアメリカ留学生... と敷居を超えたつながりがあれば、滞在はより一層充実したものになると思います。4月から知り合いが2人Vulcanus in Europeで派遣されるのですが、各人の行先が違うにもかかわらず、ガイダンスの日に全員がコンタクトを取れる環境を構築したといいます。夏休みのパークレーの語学短期留学についても、東大はプログラムメンバー全員が顔合わせをする機会を斡旋し、ルームシェアもしたと聞いています。ガイダンスが一方的な情報提供の場だけでなく、参加者同士のネットワークを構築する場所、例えば簡単に飲み物を用意して、終了後に30分間歓談できるような場になるだけでも、変わってくるのではないかと思います。(予算の事情などから、すぐには難しいと察するところですが...)

修士1年の前期は、出発前に忙しくない人のいない大変な時期です。周囲の力も借りながら限られた時間の中で新しく偏っていない情報を得る、非常に難しいことだと思いますが、

滞在初期に充実した日々を送ることは、留学の成功の大きなカギを握ると思います。
どうか、後悔しない経験を。遠巻きながら、応援しています。